

## 目 次

第 11 講	助動詞 (7)	62
第 10 講	助動詞 (6)	56
第 9 講	助動詞 (5)	50
第 8 講	助動詞 (4)	44
第 7 講	助動詞 (3)	38
第 6 講	助動詞 (2)	32
第 5 講	助動詞 (1)	26
第 4 講	形容詞・形容動詞と係り結び	20
第 3 講	動詞 (2)	14
第 2 講	動詞 (1)	8
第 1 講	古文入門	2

第 12 講	助詞 (1)	68
第 13 講	助詞 (2)	74
第 14 講	紛らわしい語の識別 (1)	80
第 15 講	紛らわしい語の識別 (2)	86
第 16 講	敬語 (1)	92
第 17 講	敬語 (2)	98
第 18 講	和歌の修辞	104
第 19 講	漢文入門	110
第 20 講	漢詩	116
付録	— 文語文法要覧	122

# 第5講 助動詞 (1)

## 基礎学習

### 1 助動詞の接続と活用

野球やサッカーなどのスポーツを観戦するとき、メンバー表とポジションがわからないと見ていても面白くありませんよね。一人一人の選手の区別がつかないからです。助動詞の学習も同じです。助動詞には、同じような形の語がたくさん出てきます。これを一つ一つ区別できなくては、古文は読解できませんし、当然面白くありません。そして、一つ一つの助動詞を区別するのに絶対必要なのが、助動詞の接続と活用の知識です。メンバー表やポジションのようなものだと思うので、早めに覚えてしましましょう。主要な助動詞は二十八語あります。

助動詞の接続とは、各助動詞の上の語の活用形のことです。助動詞は、それぞれ自分が接続する相手を決めています。例えば、〈打消〉の助動詞「ず」は未然形にしか接続しませんし、〈過去〉の助動詞「けり」は連用形にしか接続しません。助動詞の学習は、まず、この接続を覚えることから始めましょう。

未然形接続	る・らる・す・さす・しむ・ず・じ・む〔ん〕・むず〔んず〕・まし・まほし (11語)
連用形接続	つ・ぬ・たり〔完了・存続〕・けり・き・けむ〔けん〕・たし (7語)
終止形接続	らむ〔らん〕・らし・べし・まし・めり・なり〔伝聞・推定〕 (6語)
体言または連体形接続	なり〔断定〕・たり〔断定〕・ごとし
	サ未四已接続 り

### 確認問題

四段活用動詞「咲く」に次の助動詞を接続させると、どのような形になるか。例にならって答えよ。

- |     |     |   |     |   |
|-----|-----|---|-----|---|
| (例) | ず   | 〔 | 咲かず | 〕 |
| (1) | ぬ   | 〔 |     | 〕 |
| (3) | む   | 〔 |     | 〕 |
| (2) | めり  | 〔 |     | 〕 |
| (4) | ごとし | 〔 |     | 〕 |

↓終止形接続の助動詞は、ラ変にだけは特別に連体形に接続するので、そのことも覚えておこう。

↓「サ未四已接続」とは、サ変動詞の未然形または四段動詞の已然形に接続するということ。「り」という助動詞は、このように非常に特殊な接続をするので注意しよう。「サ未四已」で「サミシイ」と読み、「サミシイ」〈完了〉の「り」と覚えておこう。

### 確認問題 解答

- (1) 咲きぬ (2) 咲くめり  
(3) 咲かむ (4) 咲くごとし

次に助動詞の活用の仕方覚えましょう。助動詞の活用は、主要助動詞二十八語の活用表をすべて暗記してもよいのですが、それは、少し大変です。ほとんどの助動詞は、用言のいずれかとはほぼ同じ活用をしますから、何と同じタイプかを分類して覚えてしまえば、一つ一つの活用表は暗記せずに済みます。活用のタイプで分類してみますので、覚えてください。

特殊型	ず・き・まし			無変化型	らし・じ		
	ラ変型 たり(完了・存続)・なり(伝聞・推定)・めり・けり・り・たり(断定)・なり(断定)						
形容詞型	べし・まし・まほし・たし・ごとし						
四段型	む(ん)・らむ(らん)・けむ(けん)		サ変型	むず(んず)		ナ変型	ぬ
下二段型	る・らる・す・さす・しむ・つ						

### 確認問題

次の助動詞を、(例)にならって( )内の指示に従って活用した形を答えよ。

- (例) めり(連体形) ( ) める ( )
- (1) べし(已然形) ( )
- (2) けむ(連体形) ( )
- (3) ぬ(連用形) ( )
- (4) つ(未然形) ( )
- (5) むず(連体形) ( )
- (6) らる(已然形) ( )

接続と活用を一通り覚えたら、次に、各助動詞の意味や用法の詳細を勉強しましょう。

## 2 「打消」の助動詞「ず」

【活用】 特殊型なので、しっかり覚えておきましょう。形容詞とちよつと似ています。

基本形	未然形		連体形		已然形		命令形	
	ず	ず	ぬ	ね	○	基本活用		
ず	ず	ず	ぬ	ね	○	補助活用		
ず	ず	ず	ぬ	ね	○	補助活用		

↓助動詞の活用の覚え方は、

- ① 特殊型と無変化型をまず覚える。特に特殊型は、一つ一つの活用表をしっかりと暗唱すること。

② ①の助動詞以外は、

「り」 ↓ラ変型

「し」 「じ」 ↓形容詞型

「む(ん)・らむ(らん)・けむ(けん)」 ↓四段型

「むず(んず)」 ↓サ変型

「ぬ」 ↓ナ変型

のように整理して覚える。

- ③ ①②以外の助動詞が出てきたら、すべて下二段型。

### 確認問題 解答

- (1) べけれ (2) けむ (3) に
- (4) て (5) むざる (6) らるれ

↓「ず」の活用は、形容詞と同じようにできたものと考えられる。補助活用の役割も形容詞と同様、主に助動詞を接続するためと考えればよい。

【接続】 「ず」は未然形接続です。

【意味】 〈打消〉 ～ナイ

### 3 〈過去〉の助動詞「き」「けり」

【活用】 「き」は特殊型、しつかり暗唱しましょう。「けり」はラ変型です。

基本形	き	けり
未然形	(せ)	(けら)
連用形	○	○
終止形	き	けり
連体形	し	ける
已然形	しか	けれ
命令形	○	○

【接続】 「き」「けり」とも連用形接続です。「き」は、カ変とサ変は未然形にも接続します。

【意味】 a 〈過去〉 ～タ

ただし、「き」と「けり」の間には、

き ……話者の直接体験の過去(～タ)

けり……伝聞した過去(～タソウダ)

という相違点があります。

b 〈詠嘆〉の「けり」 ～ダッタノダ・～(ダ)ナア

過去から続いてきたことに、今初めて気づいた驚きを表します。別名〈気づき〉の「けり」。

#### 確認問題

次の文中から、助動詞「ず」「き」「けり」をそのまま抜き出し、文中での活用形を答えよ。

- (1) 花なむ咲かぬ。〔 〕
- (2) 花こそ咲きしか。〔 〕
- (3) 花ぞ咲きける。〔 〕

↓ 「き」の未然形「せ」は、「せば」という形でしか出てこない。また、「けり」の未然形「けら」は、上代にのみ用例が見られる。

↓ 活用表中の「○」は、その活用形の用例が存在しないことを示している。「○」の位置については、あまり神経質にならなくてもよい。

↓ 「話者の直接体験」というのは、話し手が直接自分で体験したこと、あるいは目撃したことという意味。したがって、話者が動作の主体にならなくても、話者がその場で聞き出したことに対しては、「き」を用いることができる。

↓ 「き」と「けり」は、現代語に訳すときには同じと考えてよい。

↓ 〈詠嘆〉の「けり」は、あることに気づいた驚きを表すが、このような場合、現代語では、「～ダッタ・～ダッタノダ」という表現をすることがある。「あつ、明日は試験だった」などというのがそれ。「～ダッタ」と言うとは過去の表現のようだが、〈詠嘆〉の「けり」の訳語としても許容。

#### 確認問題 解答

- (1) ぬ・連体形 (2) しか・已然形
- (3) ける・連体形



次は「土佐日記」の一節で、作者一行の乗った船が室津の港で、悪天候のため出港できずにいるときのことを記したものである。

二十日。昨日のやうなれば、船出ださず。みな人々憂へ嘆く。苦しく心もとなければ、ただ、日の経ぬる数を、「今日いく日」「二十日」「三十日」と数ふれば、指も（損なふ・る・ぬ・べし）。いとわびし。夜はいも寝ず。二十日の夜の月（出づ・ぬ・けり）。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。かやうなるを見てや、昔、安倍の仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は、海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂の主、「わが国に、かかる歌をなむ、神代より神もよん結び、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しびもある時には、詠む」とて、詠めりける歌、

青海ばらふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞ（詠む・り・けり）。かの国人聞き知るまじく、思ほえたれども、言の心を、男文字に様を書き出だして、この言葉伝へたる人に、言ひ知らせければ、心をや聞きえたりけむ、いと思ひのほかになむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じ事なるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

（「土佐日記」）

重要古語

心もとなければ || じれったいので。  
 安倍の仲麻呂 || 奈良時代の漢詩人。  
 唐に留学、玄宗皇帝に仕え、三十三年後、帰国を試みるが、果たせぬまま長安で没した。  
 馬のはなむけ || 送別の宴。  
 よん結び || お詠みになり。  
 上中下の人 || 身分の高い人も低い人も。  
 ふりさけ見れば || 遙か遠く仰ぎ見ると。  
 春日 || 奈良市街東方の丘陵地。  
 かも || 詠嘆の終助詞。  
 男文字 || 漢字。  
 この言葉伝へたる人 || 日本語を習得している人。  
 そのかみ || その当時。

問一 ①～③の( )内の語を活用して、適当な形に改めよ。

① [ ] [ ] [ ]

③ [ ] [ ] [ ]

問二 傍線部a～dの「ける」「けれ」の中で、異なるものを一つ選び、その記号を答えよ。

[ ] [ ]

問三 二重傍線部「三笠の山に出でし月」について、「三笠の山に出でける月」と言ったときとの違いを具体的に説明せよ。

[ ] [ ]

問四 本文の内容と一致するものを、次の中から一つ選び、番号を○で囲め。

- 1 室津の港の山の端から出た月を見て、作者は昔、中国で安倍仲麻呂が詠んだ歌を思い出した。
- 2 安倍仲麻呂は、送別の宴を開いてくれた中国の人達に、日本の神様の詠んだ歌を送った。
- 3 仲麻呂は、歌の概略を漢字で書き表し、日本語を理解できる人に歌の意味を説明した。
- 4 仲麻呂から歌の意味を聞いた中国の人達は、月に対する人の感じ方は同じはずなのに、共感してくれなかった。
- 5 作者は、仲麻呂の歌を思い出して、仲麻呂が都で見た月が、今、室津の波間から昇ったという歌を詠んだ。

POINT

問一 助動詞の接続と活用を思い出して組み合わせること。

問二 助動詞の接続をチェックしてみよう。c「けれ」の上の語は、〈使役〉の助動詞「す」である。

問三 助動詞「き」「けり」は、両方とも〈過去〉の助動詞だが「き」には、話者の直接体験というニュアンスがある。